アニキは妹で、妹はアニキで。

生成 環

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アニキは妹で、妹はアニキで。

【Ｎコード】

Ｎ０１５３Ｄ

【作者名】

生成　環

【あらすじ】

恵太と貴子のふたりは、近所でも仲がいいと評判の兄妹。でも二年前、父親がしたあることが原因で、兄妹の男らしさと女らしさが入れ代わった。はじめてボーイズラブを書きますが、性描写はありません。

プロローグ（前書き）

野尻市に住む河崎恵太（かわさきけいた）は、野尻第二小学校の六年生。
父親は二年前に離婚。いまは母親の信子（のぶこ）、妹の貴子（あつこ）の三人ぐらしだった。
恵太と貴子の兄妹には、あるヒミツがあった……。

※※※

「いっしょに帰ろう。お兄ちゃん」

学校の帰り道。貴子は、恵太を見つけると、恵太のところにきた。

「じゃあボク、お兄ちゃんと帰るから。バイバイ」貴子は友達にいった。

「あっちゃん、またあしたねー」

友達とわかれ、貴子は恵太といっしょに家に帰った。恵太と貴子のふたりの兄妹は、近所でも有名なほど仲がよい兄妹だった。

「もうすぐお家につくからガマンしろよ」貴子は恵太にいった。貴子の言葉づかいは乱暴で、まるで男の子みたいだった。

「わかったから……、わたしガマンするね……」恵太はいった。恵太の言葉づかいは女の子みたいにおしとやかで、貴子の逆だった。

「ふたりともおかえり」信子は、学校から帰ってきたふたりを迎え

た。

「母さんただいまー」貴子はいった。

「わたし、着替えにいくから……」恵太はいうと、二階にあがり、自分の部屋に着替えにいった。

「母さんどうしたの。ボクの顔を見て……」

「また一段と男っぽくなったわね、貴子」

「ボクは、家では貴子でなくタカシ」貴子は信子にいった。

「そうだったわね……。二年前に、父さんがあんなことを起こさなければ……」

「あいつのせいで、ボクとメグミは……」貴子は吐き捨てるようにいった。なぜこんなことになったのか。それは、いまから二年前だった。

プロローグ

野尻市に住む河崎恵太（かわさきけいた）は、野尻第二小学校の六年生。
父親は二年前に離婚。いまは母親の信子（のぶこ）、妹の貴子（あつこ）の三人ぐらしだった。
恵太と貴子の兄妹には、あるヒミツがあった……。

※※※

「いっしょに帰ろう。お兄ちゃん」

学校の帰り道。貴子は、恵太を見つけると、恵太のところにきた。

「じゃあボク、お兄ちゃんと帰るから。バイバイ」貴子は友達にいった。

「あっちゃん、またあしたねー」

友達とわかれ、貴子は恵太といっしょに家に帰った。恵太と貴子のふたりの兄妹は、近所でも有名なほど仲がよい兄妹だった。

「もうすぐお家につくからガマンしろよ」貴子は恵太にいった。貴子の言葉づかいは乱暴で、まるで男の子みたいだった。

「わかったから……、わたしガマンするね……」恵太はいった。恵太の言葉づかいは女の子みたいにおしとやかで、貴子の逆だった。

「ふたりともおかえり」信子は、学校から帰ってきたふたりを迎え

た。

「母さんただいまー」貴子はいった。

「わたし、着替えにいくから……」恵太はいうと、二階にあがり、自分の部屋に着替えにいった。

「母さんどうしたの。ボクの顔を見て……」

「また一段と男っぽくなったわね、貴子」

「ボクは、家では貴子でなくタカシ」貴子は信子にいった。

「そうだったわね……。二年前に、父さんがあんなことを起こさなければ……」

「あいつのせいで、ボクとメグミは……」貴子は吐き捨てるようにいった。なぜこんなことになったのか。それは、いまから二年前だった。

第一話：二年前の夏休み。（前書き）

同性愛とありますが、性描写はありません。

第一話：二年前の夏休み。

兄の恵太は元気で活発な男の子。妹の貴子はおとなしい従順な女の子だった。二年前までは……。

※※※

「父さん、オレたちをよんでどうしたんだろう」恵太は妹の貴子にいったが、貴子は無言だった。

二年前の夏休み。父親の正樹（まさき）は、信子に自分の勤める阿久津（あくつ）研究所に恵太と貴子を遊びにくるようにいった。

「夏休みだから、お父さんのところに遊びにいき、お父さんに甘えなさい」と信子はいった。

正樹の勤める阿久津研究所は山のうえにある。恵太たちの住んでいた街からバスで乗りついでも二時間以上もかかるところにある。だから貴子は、バスが山にのぼるとバスに酔ってしまい、なにもしゃべれなくなった。

阿久津研究所は、バスの終点よりもまだ先だった。　山のうえだからすこし涼しいので、貴子はバスの酔いすこしだけ楽になった。

「お兄ちゃん。このあとどうするの……」

「父さんが研究所の人がくるといってたけど。貴子、気分はよくなったか」

「……お兄ちゃん。わたしもう家にかえりたい……」貴子は弱々し

くいった。
恵太もこれからどうやって研究所にいくのか。まさか歩いていくのか……。恵太がそんなことを考えると、森のなかからひとりの女性がでてきた。

「あなたたちが、恵太くんに貴子ちゃんね」その女性は、恵太たちに近づくとこういってきた。

「そうですけど……。あなたは……」恵太はいった。
「はじめまして。私は阿久津研究所の所長。阿久津和歌子。よろしくね」

「エッ、所長さんですか」恵太はおどろきの声をだした。

「わかいからビックリしたのね。研究所にくるひとはみんなそういうわ。あら妹さん、どこかぐあいがわるいの」

「妹は、バスに酔ってしまって。貴子、阿久津所長にアイサツしなさい」

「はじめまして。妹の貴子です……。父がお世話になっています……」貴子は弱々しくいった。

「貴子ちゃん、ほんとに大丈夫なの」

「だいじょうぶです……」
「大丈夫じゃないだろ。阿久津研究所はここからまだ遠いのでしょ」恵太はいった。

「それは心配しないで。研究所はちかいから」

※※※

和歌子に案内された恵太と貴子は、それを見た。
それはただの箱だった。恵太は、なんだろうと和歌子に聞こうとした。

「さあ、ふたりとも、なかに入って」

和歌子にいわれて、ふたりはなかに入った。操縦席もない箱にどうやって動かすのだろうと恵太は思った。

「ふたりとも、もうでてもいいわよ」

恵太と貴子は、箱のなかを出た。そしておどろいた。もう研究所にいたからだ。

「どう、ビックリした」

「スッゴーイ。どうしてなの」貴子はいった。

「これはまだまだ開発途中だけどね」

「ということは、まだ未完成なの」

和歌子は箱の原理をかんたんに説明した。
この箱は転送装置で、送信機と受信機に別れている。箱のなかに入り、装置を発動させると、なかのものは一度分解され、電線を通って通りぬけたあと、もうひとつの箱でまたもとにもどるという仕組みだった。

「でも、これがなぜ未完成なのです」

「それは恵太、これが電線を通ってしかできないからだよ」

「お父さん。どこからきたの」貴子は不思議そうにいった。

「それは貴子、あそこのドアからだよ。所長、私の子供たちを向かいにいかせてありがとうございます」正樹はいった。

「ねえ父さん、なんで電線だとダメなの」恵太は正樹にそのことを聞いた。

「もし電線が切れたりしたら、分解された送っていたモノが迷子になり、二度ともと通りにならないだろうね。だから、電線を使わない転送装置を作っているんだよ」

「正樹博士は、その装置を作る最高責任者なの」和歌子はいった。

「所長、ちょっと……」秘書みたいな人が、耳元で和歌子に何かいった。

「わかった。すぐにいくから。……恵太くん貴子ちゃん、私ちょっと急用が出来てこの研究所を案内出来ないけど……」

「私がこの研究所を案内しますので」正樹はいった。

「では正樹博士にお願いしますね。恵太くんに貴子ちゃん、お父さんのいうことを聞くのよ」和歌子はいった。

和歌子は研究室からでていくと、正樹は時計を見て昼を過ぎていたので、最初に食堂に案内した。

※※※

「この研究所にスパイがいるというの」所長室で、秘書からこのことを聞いた和歌子はショックを隠しきれなかった。

「所長、これが興信所から調べてもらったスパイのリストです。最終的にこの三人のうちのひとりですが……」

和歌子は、秘書からリストを見せてもらった。和歌子は目をうたがった。三人のうちのひとりに正樹の名前があった。

「ちょっと、なんで正樹博士の名前があるの。博士は転送装置を作る責任者なのよ」

「じつは……、興信所の調べでは、正樹博士がスパイでないかと……」秘書はいった。

和歌子は、正樹がスパイとは信じられなかった。それに、この夏休みのときに子供を連れてきたのに……。和歌子は、なぜ自分の子供をこの研究所につれてきたのかわかった。

「正樹博士の研究室はどこなの」

「所長、どうしたのです……」秘書はいった。

「正樹博士は転送装置が出来たのよ」

「所長、それは本当なのですか」

「でも、まだある実験をしていない。だから、恵太くんや貴子ちゃんをよんだのよ」

「ある実験とは……」秘書は、和歌子がなにをいっているのかわからなかった。

「人体実験よ。正樹博士は自分の子供を実験にするのよ」

第二話：父親の裏切り。

「お父さん。食堂はどこなの」恵太はいった。

「もうお兄ちゃんたら、食いしん坊なんだから」貴子は恵太をたしなめた。

「ふたりとも、ちょっとだけお父さんの研究室にこないか」

「いいけど。父さん、なにかあるの」

「ちょっとな……」正樹はいった。

※※※

正樹の研究室の中に入った恵太と貴子は、研究室のゴミの山を見た。

「ふたりがくるから、助手に掃除させたのがマチガイだったな」正樹は落胆していた。

恵太と貴子は、研究室のゴミの山を見てた。
ゴミの山からはいろいろ変わったものがでてきた。
コーヒーカップの底にスプーンがたてに突き刺さっているものが多数。裏がえしになっているテレビやパソコンや携帯電話。
これらは、人が作ってできるものではなかった。
そんなヘンなゴミの山を見て、恵太は背筋につめたいものがはしった。

「父さん、これなに……」

「ああこれか。転送装置の実験で失敗したやつだ。でも、この失敗の山から改良を重ねて、あとすこしで転送装置が完成する」

「お父さん、おめでとう」

「ありがとう貴子」正樹はいった。正樹は、おおきな布に包まれたものに近づいた。そして布を取ると、中からでてきたものは、転送装置だった。

「これが、私が作った新しい転送装置。どうだ美しいだろう」

正樹は自慢げにいった。

恵太は、その装置はとてもイヤな感じだった。

「でも、まだ最後のテストがのこっている」

「最後のテスト……、父さん、それってまさか……」恵太はイヤな予感がした。

「そうだ。お前たち兄妹がはいるのだ。貴子、そんな不安げな表情をお父さんにみせるな」

「だってお父さん、あのゴミの山みたいになったら……」貴子はいった。

「なんだ。そんなことか。大丈夫だ。人では一回だけしたが、成功した」

「イヤだ。オレと貴子はそんなモノに入らない」

「お父さんのいうことを聞かないなんて、わがままになって」正樹は、ポケットからピストルみたいなのをだした。恵太はオモチャだと思った。正樹はピストルを撃った。弾はゴミの山に当たった。

「はやく中に入った」正樹はいった。恵太と貴子は、嫌々ながら転

送装置の中に入った。
「まちなさい正樹博士。いったい、なにをしようとしているの」和歌子と研究所の職員たちが、正樹の研究室に入ってきた。
「これは和歌子所長。ちょうど、転送装置による実験をはじめようと……」
「正樹博士、はやくやめなさい」和歌子はいった。職員たちは正樹を取りかこんだ。
「どうしたのですか。私がなにかしましたか」
「正樹博士。あなたにスパイ容疑がかかっています」職員のひとりがいった。
「そうですか……。バレちゃしかたがない」正樹は、和歌子のところにきた。
「正樹博士、なにをするのです」
「和歌子所長、心配しなくて大丈夫だから。ちょっとあなたに人質になってもらうだけです」正樹は、和歌子に近づいて、ピストルで和歌子をおどした。
「和歌子所長に職員のみなさん。私が作った転送装置の成果を、私の子供たちといっしょにお見せしましょう」
正樹は転送装置のスイッチを押した。
転送装置の中に入れられた恵太と貴子は、転送装置のドアを叩いていた。和歌子は、正樹の手をどけようとしてふたりを助けようとし

た。

「和歌子所長、そうはさせませんよ」正樹と和歌子は揉みあいになっていた。その拍子に、正樹のもっていたピストルが撃たれ、弾が転送装置に当たった。

転送装置の調子がおかしくなった。

「うわー」

「タスケテー」

恵太と貴子の悲鳴が、転送装置のなかから聞こえた。

※※※

恵太と貴子は、転送装置の中にはいなかった。

「はやくもうひとつの装置を見て」和歌子はいった。職員たちが、すこし離れたところにあった転送装置を見つけた。中からは、恵太と貴子が倒れていた。

「ふたりは気をうしなっただけです」職員のひとりがいった。

「はやく病院へ連れていきなさい」和歌子はふたりが運ばれるのを見た。

「これで実験が成功しました」

「あなたを告訴します」和歌子は正樹にいった。

「それはできません。なぜなら、私はここを出ますので」正樹は和

歌子を押しのけると、ピストルを向けたまま研究室の隅のほうにきた。そこにあったのは、さっきあった転送装置がひとつだけあった。

「いまの実験を見て、複数の人間が転送できることが証明することが出来ましたから和歌子所長に職員のみなさん。私が消えたら、みなさんにパイナップルをさしあげますので。ではさようなら」正樹は消えた。

「所長、なんで果物なんか送るといったのです」

「みんなはやく、この研究室から出て」和歌子は職員たちにいった。

「どうしてです。たかがパイナップルでしょ……」

「あれがいったパイナップルは、果物なんかでなく手榴弾のことよ。形がパイナップルに似ているからそういうのよ」

和歌子たちは研究室から出た直後、研究室は大音響とともに吹っ飛んでいった。

※※※

このことが、恵太と貴子の人生が変わるとは、知るよしもなかった。

第二話：父親の裏切り。（後書き）

第二話をお届けしました。まだはじまったばかりですが、よろしくお願いします。

第三話：入れ代わった兄妹。

貴子と信子は、恵太が部屋から出てくるのをまっていた。

「なにやってるんだメグミは……。母さん、なに笑ってるの」貴子はいった。

「だって、タカシはもうメグミちゃんのお兄ちゃん気取りだから……」信子は、クスクスと笑いながらいった。

「ゴメンなさい。タカシお兄ちゃんに信子ママ」恵太はいった。恵太の髪はポニーテールで、服装は女の子の服を着ていた。

「ふたりが入れ代わって、もう二年になるのね……」信子は、男っぽい貴子と女っぽい恵太を見ていった。

※※※

恵太が目を覚ますと、そこは病院のベットだった。

「恵太くん、気がついたようね」和歌子がいった。

「ここは……」

「病院よ。私の一族が経営している病院だから。あとで妹の貴子ちゃんがくるけど……」和歌子は、貴子のことをいうと、なぜか口ぐもった。

「貴子がどうしたの……」恵太がそういうと、いきなりカミナリが鳴った。

恵太は、カミナリの音にびっくりして耳をふさいだ。
「恵太くんはカミナリがこわいの」
「いえ、そんなことはないのですけど……」
またカミナリが鳴った。こんどのカミナリは、さっきよりもおおきな音だった。
「キャッ」恵太は、女の子みたいなかわいらしい声をだした。
「貴子ちゃんと逆だわ」恵太を見た和歌子はいった。
「それって、いったいどういう……、キャッ」カミナリの音に、恵太は耳をふさぎ、半ベソ状態だった。
恵太は、いったいどういうことかわからなくなってきた。いままでは、カミナリなんかこわがらなかった。でもいまの恵太はカミナリをこわがっている。

「アニキ、気がついた」恵太の病室に貴子がきた。
恵太は貴子を見た。
「貴子どうしたの。ワタシのことをアニキとよぶなんて……」恵太も、自分のしゃべりかたが女の子みたいなしゃべりかたをしたのに気がついた。
「なんで……、ワタシ、どうしたの……」戸惑う恵太だった。
※※※
「恵太くん。あのね、いいにくいことだけど……」和歌子は、真剣な顔をしていた。「じつは……、恵太くんと貴子ちゃんは入れ代わ

ったの」

「入れ代わった……。どういうことなのです」

「恵太くんの男らしさと貴子ちゃんの女らしさが入れ代わったの」

「アニキは信じられないかもしれないが、ボクとアニキはかわったみたいだ」貴子は恵太のいるベットに乗ると、男の子みたいにあぐらをかいて座った。

「自然とこんなふうに座るようになったんだ。アニキの座りかたも女の子座りだろ」

「ほんとだわ……」またカミナリが鳴った。恵太は悲鳴をあげて貴子にしがみついた。

※※※

「私の考えでは、あの転送装置にピストルの弾が当たったのだと思うのだけど」和歌子は、ふたりに入れ代わった原因を説明をした。

「それが、ボクとアニキが入れ代わった原因」

「あくまでも仮説だけど。正樹博士の研究室を調べているけど……」

研究室は、正樹が転送した大量の手榴弾が爆発した。破壊された研究室を捜査するのは、なかなか骨がおれる作業だった。

わかったことは、ピストルの弾と手榴弾が他国のものということぐらいだけだった。

それ以外のものは、正樹はなにも残さなかった。

※※※

「でも、恵太くんの意識がもどってよかった」

「ほんとだぜ。だってアニキ、二ヶ月も意識もどらなかったんだから」

「ホントにわたし、二ヶ月もベットで寝ていたの」

「そうよ。寝ているあいだ恵太くんは、点滴で栄養補給をしていたの。だから筋力は低下しているかもしれないから、お昼過ぎに診察するから」

「ありがとうございます。和歌子所長」

「いいのよ恵太くん。博士のせいとはいえ、あなたたちに責任はないから。まだはやいけど、お昼のごはんをもってくるから」和歌子は病室から出ていった。

病院の近くに、カミナリの落ちる音がした。

恵太はとうとう泣きだしてしまった。

「なんで、カミナリなんか怖がるようになったのかしら。貴子は平気なの」

「平気だよ。またゴロゴロと鳴ってるよ。怖かったらボクのそばにこいよ」

恵太は、貴子がなんだか頼もしく見えた。このまま貴子に守ってもらいたいという気持ちになってきた。

「うん……」恵太は貴子のそばにきた。

恵太と貴子の兄妹の立場は完全に入れ代わった瞬間だった。

第四話：ふたりのチカラ。

病室のドアをノックする音がした。貴子がドアをあけると、和歌子が車イスをもって病室に入ってきた。

「和歌子所長、その車イスは……」

「この車イスは、恵太くんがつかうの。ずっとベッドで寝ていたでしょ。さっきもいったように筋力も弱まっているから、歩くのもままならないと思って車イスをもってきたの」

「和歌子所長ありがとうございます」恵太の体に信じられないことがおこった。恵太の体が浮いていた。

「エッ。なんで、ワタシどうなっているの」パニック状態になる恵太。

「アニキ、ボクのチカラすごいだろう」自慢げにいう貴子。

「ねぇ、これって、どういうことなの……」とまどう恵太。貴子はあわてふためく恵太を見て、ケラケラと笑っていた。

「ねえ貴子、おねがいだからはやくおろしてェ」恵太は情けない声をだして、貴子にいった。

貴子は、ゆっくり恵太を車イスにおろした。

恵太は、なぜ空中に浮いたのかわからなかった。

「たぶん入れ代わったのが原因だと、和歌子所長がいってた」貴子は恵太にいった。

「そうなんだァ。ワタシにも、そのチカラというのがあるのかなぁ」

「恵太くんにもあるかもしれないわね」和歌子はいった。

「ほんとですか。ウーン、うごけ……」恵太は両手を突き出して、テーブルの上にある皿をうごかそうとした。でも皿は、一ミリもうごかなかった。

「ワタシにはないみたい」恵太は、疲れきった表情でいった。

※※※

病院の食堂は、お昼もかかわらず、意外にも空いていた。

「ちょうどいいタイミングだったわね。後もうすこししたら混むから。お金のことは心配しないで。入院中の患者や家族たちの食事はタダだから。でも恵太くんは、まだ起きたばかりで固形物は胃がよわっているから、お粥でガマンしてね」

※※※

恵太たちがたのんでいた料理が、テーブルのところにきた。

恵太はお粥。和歌子はカルボナーラ。貴子は牛丼大盛りと味噌ラーメンとテリヤキハンバーガー。

「どうしたのアニキ」たのんだ料理を食べている貴子を見た恵太は、だまってしまった。

「貴子は、たのんだ料理をちゃんとのこさず食べられるの」お粥をスプーンですくったが、あまりの熱さにクチでフーフーいいながら食べる恵太。

「これくらい平気だよ。それより、アニキはいつネコ舌になった」
たしかにそうだ。今までなら、これくらいの熱さは平気だった。
それが、お粥を冷ましてないと食べられない。
やはりこれも、入れ代わったせいなのだろうか。

「私は、恵太くんの健康診断の準備をするから、ふたりともゆっくりしていて」和歌子は食堂から出ていった。

※※※

お粥が髪の毛の中に入って食べにくそうにしている恵太。
貴子は恵太のうしろにまわると、恵太の髪をポニーテールにした。

「これでアニキも、髪がジャマにならないだろ」恵太の手に、ヘアアクセサリーをわたす貴子。

「こんどからボク、髪をショートにするからもういらない。だからアニキにあげるから、つかいなよ」

「……ありがとう貴子。ワタシ、大切にするから」うれしそうに、ヘアアクセサリーを見つめる恵太。貴子は、なんだか恵太が愛しくなってきた。
入れ代わる前は、貴子にそういった感情はなかった。しかし、入れ代わったことで、貴子は、恵太にべつな感情が芽生えた。それは、恵太を守ってあげたいと思うことだった。恵太も、入れ代わったことで、貴子が頼もしくみえたのだった。
なにかあったら、貴子が守ってくれるのでは。貴子といっしょにいると、年上という意識がなくなっていくのであった。

「はやく食べないと、そのお粥さめるぞ」
「だって、まだ熱いんだもの……」情けない声をだす恵太。
「ホント、アニキは食べるのがおそいなぁ。スプーンをボクに貸して」
貴子が、恵太のスプーンを手にもつと、お粥をスプーンですくいあげスプーンを恵太の口にもってきた。
「口をおおきくあけて、アニキ」
恵太は、貴子にいわれたとおりに口をあけた。貴子はスプーンの中のお粥をさましてから、恵太の口にもってきて食べさせた。
「どうだい。これで食べやすくなっただろ、アニキ」貴子はいった。
恵太は、貴子にちいさい子供のようにあつかわれてはずかしいのか、顔をあかくなって、ちいさくうなずいた。
そんなことを気にしない貴子は、恵太の口にどんどんお粥をいれた。貴子に手伝ってもらったので、お皿のお粥はなくなった。
※※※
車イスに座った恵太を押す貴子。
恵太が、病室の前に近づいたらある異変がおこった。恵太の病室のカベが、すけて見えたからだ。
恵太が目をこすった。でもカベがすけたままだった。恵太がカベを見続けると、病室の中の様子が見えてきた。

「病室にだれかいる……」
「なんでアニキは、そんなことがわかるんだ」
「貴子のチカラとちがい、ワタシのチカラはなんでも見えるみたいなの」
「で、中はどうなってるのか教えてアニキ」
「ちょっとまって……」恵太はカベを見つづけた。中にいたのは和歌子だった。和歌子は、天井やコンセントになにか細工をしているのが見えた。恵太は、和歌子がしていることを貴子にいった。
「ねえアニキ。和歌子所長を、あまり信じないほうがいいぜ」
「どういうことなの」
「和歌子所長も、あいつと同じように、ボクたちを利用するつもりだぜ」
「貴子、それはほんとうなの……」
「アニキの病室には、盗聴器や監視カメラがいっぱいあるぜ。だからアニキは、いまのチカラをだまっていたほうがいいぜ」
「わかったわ。貴子のいうとおりだまっている」
※※※
貴子のチカラは念力のチカラがあり、恵太のチカラは透視のチカラ。そのチカラのせいで、ふたりはいろいろなことに巻きこまれるので

あった。

第五話：和歌子の独り言。

「意識が戻ったことを母さんにいうから、夕方ごろに母さんといっしょに見舞いにくるから」

午前中の面会時間がおわりなので、貴子は病室からでていった。恵太は、病室をあらためて見た。カベの中や、コンセントの中には盗聴器がたくさん仕掛けられているのが恵太のチカラでわかった。午後二時ごろ。恵太の病室のドアをノックする音がした。

「どうぞ」恵太がいうと、和歌子と背の高い男性と小ぶとりの男性がはいってきた。

「恵太くん、体調はどうかしら」

「はい。大丈夫です」

「それはよかったわ。恵太くん、服を脱いでくれないかな」

「エッ、どうしてですか」

「そんなに驚くことはないじゃない。ただ検診するだけよ」

「そうですか……」服を脱ごうとする恵太。無言で見つめるふたりの男性。恵太は服を脱ぐのをやめた。

「どうしたの恵太くん」和歌子は、顔が真っ赤になって、からだが小刻みにふるえている恵太を見た。

「あなたたち、病室から出ていってくれないかしら」和歌子は、ふたりの男性にいった。

「なぜですか。僕らは院長にいわれて、いきなりこの患者の担当になれといわれたのですよ」小ぶとりの男性は不機嫌そうにいった。どうやらふたりの男性は医者らしく、この病院の院長の命令で恵太の担当にされたようだ。

「院長には私がなんとかいうから」

「でもですね……」小ぶとりの男性は、和歌子に抗議しようとしたが、背の高い男性に止められた。

「わかりました。私たちはこの病室から出ていきますが、お父上になんと言い訳をすればよろしいのです」背の高い男性は、和歌子にいやみっぽくいった。

和歌子は、背の高い男性をにらみつけた。

「お嬢さまのおっしゃるとおり、私たちはこの病室から出ていきます。お父上にはきちんと、このことをお伝えください」背の高い男性は、小ぶとりの男性をつれて病室から出ていった。

※※※

病室のドアが閉まる。和歌子は恵太にあやまった。

「ごめんね恵太くん。はずかしかったよね」恵太は泣きだしてしまった。

「だって、だって、知らない男のひとたちが、ワタシのハダカを見ているの。だから、だからね、はずかしいのとこわいという、頭の

なかがパニックになって……」

「もう大丈夫よ。大丈夫だからね」

まだふるえている恵太。和歌子は、恵太を落ちつかせようと、後ろから静かに抱きしめた。

「和歌子所長……」

「恵太ちゃん。もう大丈夫よね」和歌子は、恵太くんとよばなく恵太ちゃんとよんだ。

「恵太ちゃん。私は、いまから独り言をいうね。恵太ちゃんの病室には、院長である私の父が、恵太ちゃんの病室に盗聴器を仕掛けるように私に命令したの。なぜなのかは父に問い詰めたけど、父にも理由がわからないといってた。父もだれかに命令されていて、恵太ちゃんの病室に盗聴器を仕掛けるようにいわれたらしいの」

「ワタシはどうすればいいの」

「恵太ちゃんは、盗聴器を仕掛けことを知らないふりをしているだけでいいわ。でも、盗聴器を貴子くんのチカラで壊したらしいからこの病室の盗聴器は使いものにならないけどね。でも貴子くん、どうしてわかったのかしら」

「さあ……」恵太が透視のチカラで盗聴器を貴子に教え、貴子の念力のチカラで盗聴器を破壊したことを和歌子に、わざと教えなかった。

※※※

「お嬢さまのわがままにはこまったものだ」和歌子に病室を追い出された背の高い男性はいった。小ぶとりの男性は、ウンウンとうなずいただけで、なにも考えていないようだった。

「石田は、あのガキをどう思う」

「なんかナヨナヨしたガキだなぁ。そうでしょ高野先生」

背の高い男性（名前は高野武夫（たかのたけお））は小ぶとりの男性（名前は石田洋（いしだひろし））に意見を聞いたのが間違いだと気づいた。

なんで院長は、石田というお荷物とコンビを組ませたのだろう。高野は、石田の口をあけただらし無い顔を見て嫌気がさした。

※※※

和歌子があらためて呼んだ医者は、和歌子よりもかなり年齢がうえの女性であった。

「この先生は飯野妙子（いいのたえこ）先生。恵太ちゃんの担当医。私の大学時代の恩師なの」

「よろしくね」妙子は、恵太に握手をもとめた。恵太は、ゆっくりと妙子の手をにぎった。

「妙子先生。こちらこそ、よろしくおねがいします……」恵太は、蚊のなくような声でいった。

「和歌子さんから聞いたけど、これほど女の子らしいとは驚きだわ」

「妙子先生は心理学の先生でもあるの。恵太ちゃんと貴子くんのこ

とを先生に話したら、ふたりのことを診たいというので、担当医を変えてもらったから」

「そうなんですか。でも和歌子所長、なぜワタシのことを恵太ちゃんとよぶのです」恵太はいった。

「ごめんなさいね。そのポニーテールがあまりにもかわいいから、恵太ちゃんと呼んだらどうかなあと思ったけど……」和歌子はいった。

「ホントですか。このポニーテール、妹の貴子にしてもらったのです。貴子もかわいいといってくれたの」うれしそうにいう恵太。

「じゃあ決まりね。いまから恵太くんでなくて、恵太ちゃんと呼ぶから」妙子はいった。

「……はい」恵太は、ほほを赤らめて返事した。

第六話：ふたりの約束。

恵太が意識をもどしてから二週間がすぎた。
午前中は体の異常がないか検診。午後からは、恵太の体をもとに戻すリハビリというのが毎日のスケジュールだった。
でも、母親の信子と妹の貴子が見舞いにくると、恵太は甘えん坊になり、ふたりが帰ろうとすると、泣きだす恵太。だから、いつもなぐさめるのは貴子の役目だった。

※※※

「恵太ちゃんのことなのですが……」
妙子専用の医務室で、妙子は信子に恵太のことをきいた。

「恵太ちゃん、失礼、恵太くんの入れ代わる前の性格は、どのような性格だったのですか」

「恵太の性格ですか……私から見て恵太は、元気で活発な性格ですけど」信子はいった。

「恵太くんの性格テストをしたのですが……。その結果、たいへん気が弱く従順な性格なのです」

「それって、入れ代わる前の貴子の性格みたいじゃないですか」

「そうすると、恵太くんと貴子ちゃんの性格も入れ代わったことになると」

「先生、ふたりはもとにもどるのですか」

「それは、残念ながらわかりません」
「そんな……」あきらめきれない信子。
※※※
「アニキ」
「なあに、貴子」
「アニキ、恵太ちゃんとよばれているの」
「エッ……」ホットミルクを飲んでいた恵太の手がとまった。
ふふふと笑みをうかべる貴子。
「だって、和歌子所長や妙子先生が、アニキを恵太ちゃんとよんでいたのを聞いたから」
「いまでは恵太ちゃんとよばれることになれたけど。やっぱりおかしいの」
「そんなことないよ。ボクも今度から恵太ちゃんとよぼうかなぁ」
冗談まじりにいう貴子。
「話しかわるけど、あれから盗聴器はどうなった」心配そうにいう貴子。
「だいじょうぶだよ。まだバレてないよ」

「でも、安心するなよ。なにかあったら、ボクが守ってあげるから」

「ありがとう貴子。でもそのセリフ、ワタシがいうセリフだわ」

健気に年上ぶる恵太を、貴子は可愛らしく思えた。今の恵太は、貴子から見れば年下の女の子のように見えた。たとえば、恵太がいま飲んでいるホットミルク。恵太と同じ四年年の男の子の場合、そんな飲み物は女の子が飲むものだ、と大人ぶって頼まないし飲まないだろう。でも恵太はうれしそうに飲んでいる。

ベッドの枕もとに置いてある熊のぬいぐるみ。（恵太があまりにもさびしそうにしていたのを見て、いらなくなった熊のぬいぐるみを貴子が恵太にあげたものだった。）就寝時間になると恵太はいつも熊のぬいぐるみを抱いて寝ていた。そういった恵太のしぐさや行動はを見て、貴子は、恵太のことを兄というよりも妹みたいに見ているのに気づいた。

※※※

病室のドアをノックする音がしたので、貴子はチカラをつかってドアをあけた。

「また、つかったわね」

病室からはいってきた和歌子は貴子にいった。

「こんにちは」素っ気なくいう貴子。

「和歌子所長、こんにちはです」ぺこりと頭をさげる恵太。

「ふたりとも、このあたりをサンポしない」和歌子はいった。

「ボクはかまわないですけど、妙子先生には許可がいるのではないのですか」和歌子に警戒心のある貴子。
「ちょっと待ってね」
和歌子はインターホンで誰かと話していた。
インターホンの向こう側の話し相手に、和歌子はインターホンにむかって頭をペコペコ下げていた。
「どうもありがとうございます。はい、いつもわがままいってすみません」
和歌子は、インターホンを切ると、恵太と貴子に許可がでたことをいった。
「でもどこにいくのです」
「それはヒミツよ。私の取っておきの場所よ」
「そうなんですか。たのしみだね、貴子」
愉しそうにいう恵太とは反対に、貴子は不機嫌な顔をしていた。
※※※
貴子は、車イスにすわる恵太を押して、和歌子といっしょに歩いていた。でも、和歌子がなにかいっても無視していた貴子を見て、和歌子は貴子に正直に話そうとちかった。
エレベーターに乗ると、和歌子は一番上のボタンを押した。
「所長、どこまでいくのですか」たずねる貴子。
「それはヒミツ。恵太ちゃん、たのしみだね」

「うん」うれしそうに返事をする恵太。

エレベーターが止まりドアがあいた。そこは長い廊下だった。
恵太たちが廊下に降りと、和歌子は壁にあるボタンを押した。
廊下の床がゆっくりだが動きだした。
「これならはやく到着するから」

和歌子がいったとおりだった。廊下が止まったところにドアがあった。和歌子はカードを取り出すと、カードの差し込み口にカードをいれた。すると、ドアがひらいた。そこは、街の景色が一望できる広い部屋だった。

「うわぁ、貴子見て、すごくキレイな虹」恵太は興奮していった。
「どう恵太ちゃん」

「和歌子所長、こんなところにつれてくれてありがとうございます。ワタシ、なんだかナミダがでてきちゃった」

「ありがとう恵太ちゃん。時間まで見ていていいからね」

窓の景色を真剣にずっと見る恵太。
恵太の後ろに立つ貴子に、こっちに来てと和歌子はいった。恵太から離れた貴子と和歌子。
「貴子さんは、私のことを信用してないでしょ」いきなり核心をつかれて言葉がでない貴子。

「私は気にしてないから。でもこれだけはいっておくね。私は恵太ちゃんや貴子さんの味方だから」

「本当にあなたを信用していいのですか」半信半疑の貴子。
「もちろん。私はあなたたちを裏切らないから」
和歌子は手を差しだした。和歌子は貴子に握手をもとめた。
「わかりました。ボクもあなたを信用します」貴子は和歌子の手を握った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0153d/

アニキは妹で、妹はアニキで。

2010年10月9日00時22分発行